年末年始　今昔　　（メルマガ　2022 年 1 月号）

メルマガ読者の皆様、あけましておめでとうございます。今年もご登録の皆様に最新の生涯学習情報をお届けするよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、新年が近づく頃に、そこかしこで耳にするメロディーに唱歌『お正月』があります。

『♪もういくつ寝るとお正月』から始まるこの歌。作詞は東くめ、作曲は滝廉太郎で、1901 年（明治 34 年）に刊行された『幼稚園唱歌』が初出だそうですから、120 年もの長きにわたり親しまれている唱歌です。

2006 年（平成 18 年）には文化庁と日本 PTA 全国協議会が選定した「日本の歌百選」に選ばれていますが、歌詞にある凧揚げ、コマ回し、まりつき、羽根つきといった遊びは、川崎市内では極限られた場面でしか見られなくなりました。かつて和凧が洋凧に替わった頃がありましたが、今では凧は揚げる場所すらないのですから、しかたないのかもしれません。

川崎市では子ども会連合会が主催する「親子羽根つき大会」が 70 年近く続いていますが、文化継承の貴重な機会と言えると思います。「昔はよかった」と懐かしむものではありませんが、文化というものはこのように変遷していくものだとつくづく感じます。

初詣、おせち料理、お雑煮、お年玉といった文化は、様変わりしながらも続いていますので、こうしたお正月らしさはいつまでも大切にしたいものだと思いました。

年末では、「紅白歌合戦」が大晦日の夜の代名詞と言えるほどの高い視聴率を誇り、昭和の時代は 70%を上回ることがほとんどでした。その頃、我が家では一台のテレビを前に、炬燵に入りながら家族で共に大晦日の夜を過ごしたことが思い出に残ります。昨今、テレビは一家庭に複数あり、しかもメディアも多様化し、大晦日を個人個人で過ごすことも増えてきたようです。そう考えると、紅白歌合戦の世帯視聴率が低下するのも必然的なことのように考えますし、その状況で今年の視聴率 34%でもすごいことではないかと思います。

今回の「紅白」はテーマが「Colorful~カラフル~」。「紅組司会・白組司会」という呼称を止めて「司会」に統一し対抗色を薄めるなど、多様性やジェンダーレスを意識した演出になっていました。「白対赤」＝「男性対女性」という枠組みで対抗するのは時代の流れにそぐわないとの判断があったそうですが、この流れは今後加速するでしょうか。

勝手な予想をすると、そもそも「紅・白」は源平の合戦の源氏と平氏の旗印の色が由来であり、女＝紅、男＝白と決められたものでもありません。学校の運動会や各種スポーツやゲームでも「紅白戦」が性別に関わらず行われているものです。今年の紅白出場者を見ても男女混成のグループもあり、紅組、白組のどちらでもよい場合も見られますから、「紅白歌合戦」という対抗スタイルを継続しつつ多様性を考えれば、「いずれは男女対抗ではない新たな枠組みでの紅白対抗が生まれるかもしれないな」と、思いを巡らしていました。

「紅白」の在り方に限らず、伝統を踏まえながらも新たな文化が生まれるのは、世の中の様々な要因が働き合ってのことだと思いますが、文化がいかに変わるにしても、誰もが幸せや豊かさを感じるような文化が創出、発展することを願いたいものです。（N.W）